釋迦御一代記圖會

壹

へ13
4039
1

門へ13
號架
4039
1

山田亀齋 豊公参考
前北齋卍老人繍像

釋尊御一代記圖會

全部六冊

書林 東都 稲田玉山堂
浪華 岡田群玉堂

世尊一代記圖會序

光哉世尊出世難哉苦行深哉苞法不知何設權實頓漸之法兼以度一世乎夫知愚吾異其性各二經

8 42 8648

云不生不滅不增不減故
曰至道無難讀此書者見
野亭北齋為何物從多思
神紹介何益之有
天保十年冬十一月

紫野黃梅院前大德

大德四百廿五世大禪撰

空

大恩教主
釋迦牟尼如来法像

風

悉達太子之后妃
耶倫陀羅女像

地

水

浄飯大王之后
騎曇彌夫人之像

火

斛飯王之太子
提婆達多之像

釋迦如來御一代圖會總目録

卷之壹

師子頰王禪寶位太子
白國王朝迦毘羅城圖
淨飯王治世築城基
善覺臣二女入内
摩耶夫人懷妊
摩耶夫人感靈夢圖
憍曇彌夫人現瑞身圖
憍曇彌嫉妬招摩耶
儀伯無間呪詛摩耶夫人
摩耶夫人寄病并夢中説法

卷之貳

著閣診脉摩耶勸墮胎藥
老翁相摩耶説胎内皇子高德
相者們討論摩耶夫人容體圖
摩耶夫人夢裡聽千恩説
藍昆尼園催花宴
悉達太子降誕現天地瑞異 同圖
摩耶夫人逝去
悉達太子入學阿私陀仙示三十二相
悉達太子与提婆搏藝

悉達太子与諸童子角射術圖
提婆与施陀角觝圖
淨居佛一試悉達太子
提婆太子擊大象圖
淨居佛二試悉達太子
悉達太子娶耶愉陀羅女
悉達太子与達婆太子鬬馬術圖

卷之三

淨居佛三試悉達太子
淨居佛化比丘試太子圖
諸童子爲太子語諸國地理圖
悉達太子暗知擅特法墓

悉達太子出宮中赴擅特山
耶愉陀羅女与太子悲歎留別圖
悉達太子赴擅特山圖
悉達太子託遺物車匿
迦毘羅城騷動車匿獻遺物
悉達太子於擅特山師阿羅々仙 同圖
悉達太子於般若墓師伽羅々仙
天女霊鬼告因位善悪應報
耶愉陀羅女生若宮
悉達太子苦行雪山降魔軍
悉達太子得四句偈正覺成道
霊鬼授悉達太子四句偈圖

三迦葉師釋尊圖
釋尊宿迦葉石室圖
三迦葉皈伏釋尊圖

卷之四

舍利弗目蓮帰釋尊法門
聽世尊法助出罪囚獄中圖
安陸說舍利弗佛偈圖
世尊謁淨飯王若宮記如來
世尊赴夕陽山圖
阿難迦難優婆離耶愉陀羅女得道
世尊於忉利天謁二世母君
提婆寃世尊并卒都婆功徳

世尊大神通懲魔軍圖
提婆勧謀叛斛飯王
世尊使難陀羅睺羅見三冥途
世尊示二太子三冥途圖　其二
世尊昇殿賜勅衣
離婆多依無失罪囚獄中
離婆多遭訶責圖
難陀王即位并淨飯王崩御
靈鷲山三迦葉大闘魔軍
三迦葉与魔軍闘神通圖
魔種欲妨佛法却寃

提婆蠱惑諸國太子　同圖
欲害世尊提婆墜陷圖
目蓮千活地獄救提婆圖
須達宿月蓋舍拜世尊
須達長者買祇陀園
滿地布黃金須達買祇陀園圖
掬神通舍利弗降六道師
舍利弗現大神通挫道師圖

卷之上

祇園精舍造立毘首謁奎摩羅天童扶謁摩令造木佛圖
世尊說未佛功德
大愛道比丘尼涅槃
流離王屠殺伊沙衣耶國人民
流離王屠殺伊沙衣耶國人民圖
流離王雷死天火燒宮殿
流離王雷死天火燒宮殿圖
雷神罰流離王王臣圖
釋尊御一代說法大略
舍衛國人民屠大魚圖
釋尊遺言并涅槃
如來滅後現五妙神力

總目錄畢

目錄

師子頬王禪寶位太子
白國王胡迦毘羅城
淨飯王治世窠内
善覺臣二女入内
摩耶夫人懷妊
摩耶夫人感霊夢圖
憍曇彌夫人現蛇身圖
憍曇彌嫉妬招摩耶

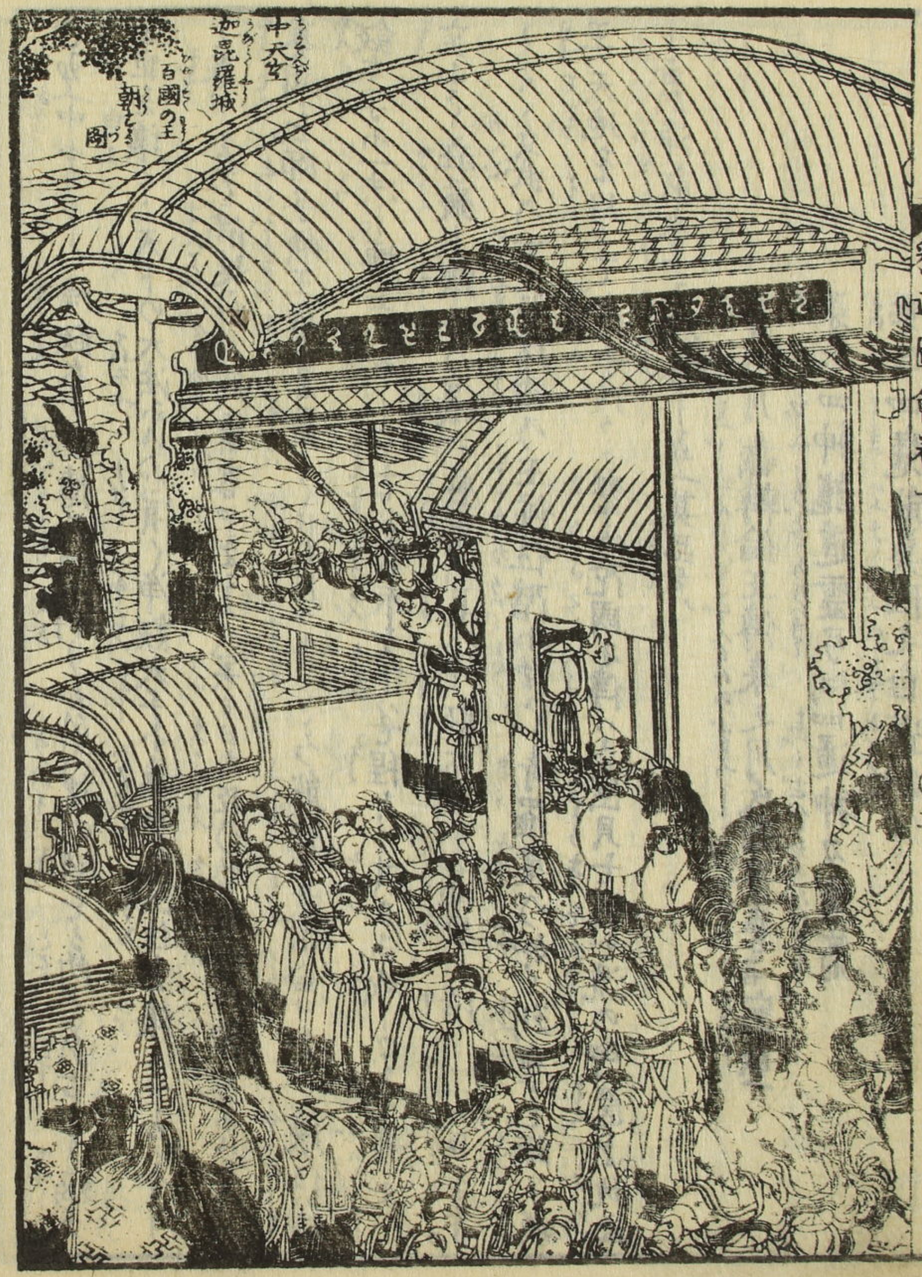
儀伯魚閒呪詛摩耶夫人
摩耶夫人奇病并夢中説法

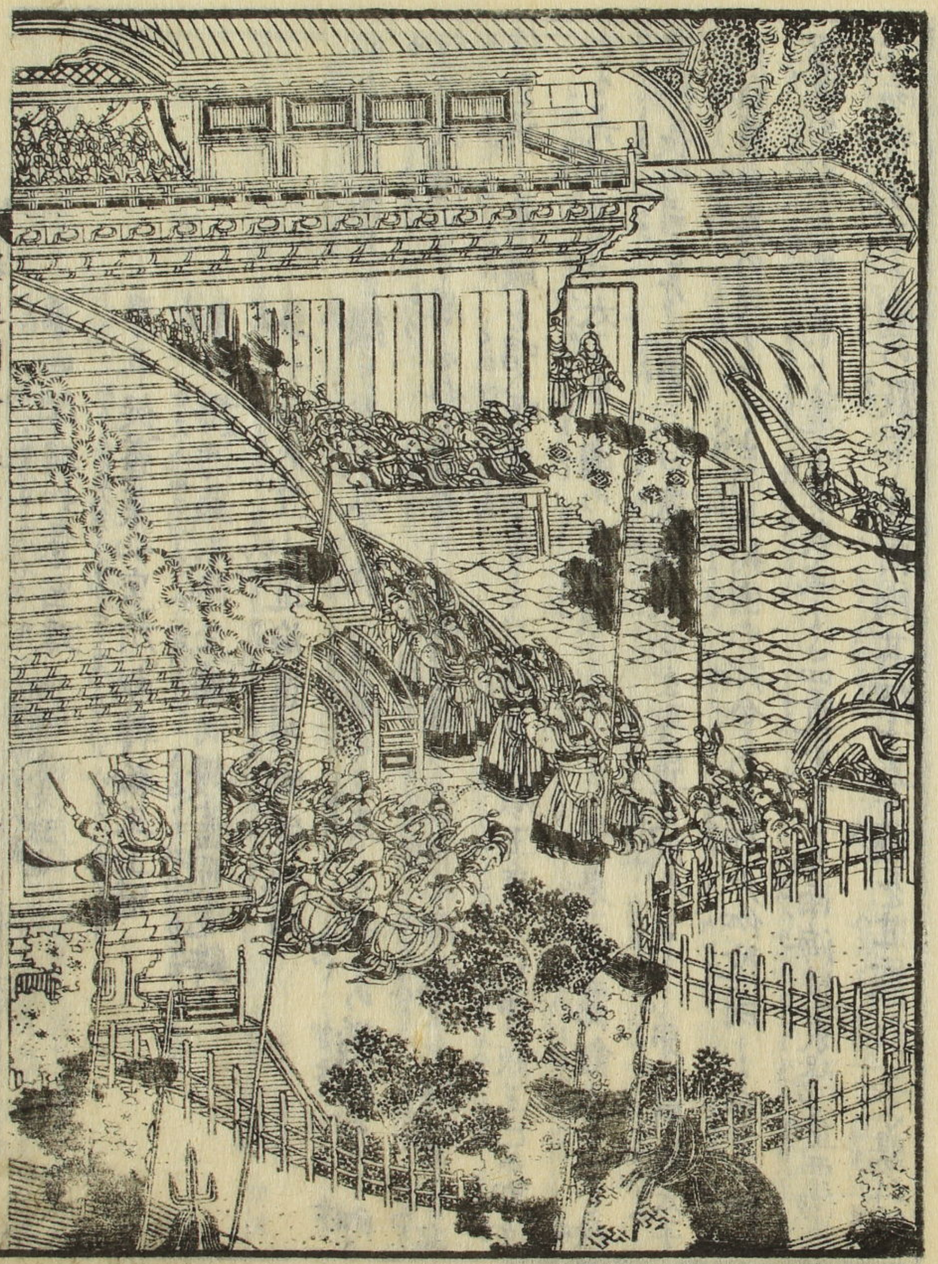
と称する此王ホ四人の皇子在せり第一浄飯太子 御父也第二甘露飯太子 可雖の弟なり第三ハ白露飯太子 提婆の弟なり第四斛飯太子 又弟なり此四人乃皇子ヒ皆賢智ホ勝れ頬王ホ聖徳明ホく萬民を撫育おくしく萬方安寧なり然ホ師子頬王年齢已ホ耳順ホ及ひくも一日文武乃百官を朝廷へ召ま頬王紹して曰朕祖宗乃纉を受くて国政を聴こと五十年。卿等国忠を属政を補佐ホより四天下昌平ホく逆乱の瀾起を故ホ朕宮中ホ安卧しく無比乃娯楽を極る叓を得くり然ども齢已ホ傾ケく起居心ホ任せざと朝政を失忘をる所多れど恐くハ萬機の政を過つ叓あら今因くて王位を太子ホ纉り朕ハ山居しく静ホ老を養ん度思つ卿们並ビく商議して四乃太子の裡十善乃位を践ム叓ヒ器量を見定帝位ホ即しめよと宣命ある。群臣紹命を奉りく あつと畏り領掌しくろう。三公の第一日光臣階を進ホく奏そしく紹命乃趣ヒ のも芽出しく叡慮ホハ臣愚案を回しホ四人の皇子何ぞも聰明叡知ホ渡せ玉ホ中ホも今しく浄飯太子ハ仁徳天地ホ則りむひ人望の飯とる所とそ古より嫡子ホ世を纉こと天下の大法ホハなれ須く浄飯太子ホ萬乗の宝位を纉らせ玉ふべしと奏しく名れど満廷乃月卿雲客口をそろくて実ヒ日光臣乃啓奏理の當然ホ合りとく纉位浄飯太子ホ一決。博士ホ命じく吉日良辰を卜ひ程なく其日ホ成しぬ王殿を七宝ホて荘厳し纉位乃儀式厳重ホ具へ浄飯太子を高座ホ結ひ三大臣を首とし文武乃百官緒國乃王侯位階ホ依しく奇羅星乃如く列坐ひ師子頬王ハ天地を拝して御手ぞう摩伽陀國ホ傳る宝貝七宝七流の御筐を執出しく浄飯太子ホ授与しぬ其品々ハ

第一月藏轉倫王傳来之月氏國景普垂宝璽

第二四神龍道璽弓同四通神力霊箭

第三四魔能莫悩之白蓮剣


中天竺
迦毘羅城
白國の王
淨飯王



第四闇明如意宝珠　所謂衆光珠也
第五從蓬萊仙宮所獻轉輪王王冠
第六拂汚濊不淨玉　幡同縵蓋飛竜鉾
第七五天笠山道海道陸野道地圖

右七種の宝貝を獲りむ。太子敬て頂戴あり夫より種々の儀則ありて即位の式滞なく畢れむ。満堂の公卿百國の王一斉に浄飯王を拜賀して宝位を祝し萬歳を唱へ悦勇まざる者なし。頻王重ね曰浄飯王已に即位ある上。残りの三太子も小國の王に封を與へ。先第二甘露飯太子とで位官伯長の司となし第三白露飯太子を聖道文武の司とし第四斛飯太子を白道無為の司となし且封國の紀命ある抑又伽陀國より四方の國と四道に分てり東八東卜道と号其末北陽道是なり。國の數四十五箇國其裡十五ケ國を甘露飯王に賜ひ餘

耶羅國を任國と定らる南八南陽道其末三道に分てり青陽道白陽道黄陽道國の數三十五ケ國其裡青陽道五ケ國を白飯王に賜ひ尸羅拳國を任國と定らる西八西往道其末二道に分てり伯舒道北陰道國の數二十三ケ國其裡伯舒道三ケ國を斛飯王に賜ひ伊婆耶國を任國と定らる偖北八北陸道其末二十四道に分てり。南延北易微子と云山海郊野或千里とも云ふ涯を去ること是を五郡七嶽十蘭七戸三滴一島と乎なり其上且三太子も任爵封國有れば帝恩を厚く報ひ悦ぶ妻斜なる頻王も睿慮穏ふく與妻を同じ賑ひ樂を究め酔を盡し後退散ぞろ。是より頻王八仙洞に移住ひ靜に老を艱ひて終に宝算八旬ぬく登霞假有名る八尊ぞろ。

浄飯王治世纂畢

浄飯王八萬衆の宝位を受く轉輪王の位を践天皇地皇醫藥明道の政

奉掌ヲ納リ一ク。群臣を朝廷ヲ集て紹命あり。そハ朕若年不徳乃身を
以ク天位を践ム。慙愧ヲ不堪とクとも又大王乃厳命已叓を得ヲ宝祚を
辱せり。卿们宜ク朕が不敏を補ヒ。忘乃過失をも練り正シ。政道邪曲なく
奢を省キ倹を守り。萬民をシテ安逸ならしめよ。國豊ヲ民栄ヘ道廣ク
四竟昌平なるハ朕が願所なり。それ人を真実をクス。ク又ク慈愍をクス。ク母ク
敬をクス。ク兄ク。信をクス。ク弟とを教ヘ。如是なれば國中皆父母萬人皆兄弟
なり。人の悪をなさゝハ是を練ち人乃善をなさゝハ倶ヲ従ヒ行なヘ。萬人ハ一人の師
なり。一人を萬人の師なり。卿们此旨を時々民間ヲ未ざまで觸知しめよと宣ひ
それば三公九卿ちゝめ月卿雲客同ク旨ヲ感ジ。実難有倫言ヲかゝふり。各
王命の趣を緒道の民へ觸渡ればこれば萬民感泪を流シ。王の徳を称せざるハ
なし。浄飯王ハ如是乃仁君ヲク。朝暮の政事正シ。一日も怠りヲハさればこそ三光明
ヲ照シ。土肥國豊ヲ五穀年毎ヲよく登世乃安静なる叓たとへ万民皷

腹シ。楽ヲ唱乃言王乃聖齢千歳を保せおへんを願ひ奉る。然ヲ三公乃
人月光臣浄飯王ヲ奏シ。曰大王乃仁徳海内ヲ普ク。國土年々ヲ肥百穀熟
豊熟シ乃酒國家の般楽日を思ヲ。都城乃裡ヲク地を擇ヒ四箇所乃霊
墓残築ヒ春夏秋冬ク其祈ヲおあらつく。大王自已墓ヲ登リおひ民の耕作
行旅乃往返を覧シ。動ク人賞シ怠る者を厲シ。下民怠慢なく業を勤め
四天下愈静謐ヲ治リ。ぐシ美ヲ浄飯王御悦喜限なく是より朕が意ヲ
合リ。急ぎ地を擇ヒ墓を築よ。倫言あるおぞ月光臣領掌シ。自已地理を
考へ百工を聚ク。四座の高墓を営ヲ造まむるヲ百姓是を安ク大いヲ怡び我も
大王治國の為ヲ霊墓を築ヲ報恩乃為一車乃土一磚の不をも運よくシて我も
くと寄聚者我萬人乃數をもらず。刀屬ク築ク程ヲ。不日ヲ〻ク四座乃
霊墓成就せりぐ月光臣依悦ヲ勝ず。宮殿ヲハ金銀珠玉を鏤ヒ水日旧の簾錦
繍乃帳ヲも及ね迫磨ヒ其旨浄飯大王ヲ奏をるおぞ。帝歓喜斜なるぞ

緒臣下を従へ、霊墓へ幸臨あり。文道の博士を召筆道の堤銘を撰ず。山陵の墓の名を額面ゐ題させ給ふ。博士ども深く勘考へ。先東の墓を吉龍城と号へ春の眺望ゐ備南の墓ハ波梨舎耶城と号へ夏の景を臨み西ハ月景城と号へ秋望の墓へ北ハ並那離城と号へ冬の景色を望む墓へよりハ浄飯王ハ四季折々ゐ頃ひそれぐくの霊墓ゐ御幸あつて農耕の艱苦行旅の疲労を詳覧ましまし愈朝政を平仁澤を施ましまるが矣ゐ附ても睿慮を慰ゐハ春ハ遠山の霞融々と霞く微風萬花香を送り。御衣の袂も見が為ゐ匂を加へ夏ハ玉階雲ゐ排へ蝉声雅楽を奏し薫風龍鮪の汗をそゝぎ秋ハ皓月錦帳を照し。瑟々たる涼風梧桐を拂へ。天津星も王前ゐ朝せるゝと疑ひ冬ハ四郊の雪雲端ゐ晴朧日の三白将ゐ翌年の豊饒を奏せるが似へ。四季折々の眺望限なへ面白ければ萬機の御政務の余暇ある毎ゐ緒臣と倶ゐ霊墓ゐ御墓を促へへ。君臣楽をともゐせよ。或時日光臣冠を傾け奏へるハ。大王受禅ましてより。廣へ民ゐ徳沢を施し。玉化至ね隈もなくゐ萬民業を楽へ君を思ふこと赤子の父母を慕ゐが如へ。然ども御代の悠久ならん事を憂ひ楽の中ゐ薄氷を踏の怕絶ず。夫天あれず地あり昼あれば夜あり春夏凍々ふへく秋冬沈遅へ。草木の花咲菓結ハ皆造化の功ふへ。不窮の道なり。君今富四天下を保ち貴へ轉輪王ぁれず。御望へへ可さる事ぁれども只願ふ所ハ后妃のみなり。宜へ才色勝へる夫人を擇へ宮妃ゐ備へ御代を嗣ぬべし六十を儲むへと奏へるれば。満座の緒卿大ゐ感歎へ実よくもやされる者ふ維へ此昔残存せざるぞよ。大臣の奏聞こそ萬代不易の計策何事ぁら此上のらぞよ。仰願ハ宮妃を迎させ玉ひ臣下及び萬民の心を安へへもへと異口同音ゐ奏へる大王借睿聞あり群卿の奏もる所其理ありとゐへども朕父王の位を受継で未ず我幷ゐあらず。迎ゐ恐くハ色ゐ荒の緒を唱られ乱國の端ゐも曳出さんと辞ゐを日光臣亦練て曰陰陽和合ハ天地の定理男女

夫婦八人間の大倫なり大王御年若く在ことも后妃を迎へ玉ひ何ぞ悼らいべき
と幻を盡し〳〵練奏〳〵るふそ淨飯王もさのみ八爭ひよみ玉ひ此上ハ卿們勸ゐ
順をしと宣ひそ日光臣ぐゐ緒大臣歡喜踊躍し御世長久の基何ぞ此
上のいでんとそ御妻ハ閑ヒ舞樂を奏して衆萬歲を祝ひ時ゐ月光大臣
進ミ出く曰右より善道ハ早く行ひ悪道ハ早く退けよと縷り雖ゐてもあき
后妃ゐ備ぐゐ程の才色全ヒ婦人あそび早く啓奏有ハべと告られど烈位な
と同意し我もくと冠ゐ傾け后妃ゐ具ぐゐ佳人を忘ゐ名く書紀し三大臣ゐ
呈ミ其數凡一千五百余人とぞ申ける

善覺臣二女入内

斯〳〵群臣退出し緒臣下ゐ抜達ミる所ゐ美婦人を悉〳〵召寄王の叡覽
ゐ具くるゐ其中ゐ好容夫人芙蓉夫人〳〵衆女の中ゐも特ゐ勝し佳人を擇
出しゐひ好容夫人ハ波梨舍耶城ゐ住しゐ芙蓉夫人ミ並那離城ゐ住しゐよ

淨飯王の叡慮ゐ稱ひ玉ふやいなや龍顏麗〳〵ふえみそ
ゐ玆ゐ或官人奏して曰緒大臣一千五百人ゐ宮妃を擇ぶ献とくるもいやミ絶世
ゐ佳人をそなゑ臣安西徑道の内仙乘國ゐ守官善覺大臣ゐ二人の女あり
姉を瞿曇彌と呼妹を摩耶と号ミ。ともゐ無雙ゐ美人ゐ。眉ハ翠羽の如
く面ハ白玉よ似く。素雪の膚妙にて。揚拇ゐ腰和やゐ且ゐ増てく今ぞれハ
其長高く且ゐ減と一ゐすれゐ其長短く。嫣然とく一さび笑ゐ飛鳥くぶり
嬌姿とく二さび咲ゐ海鱗浮む。逍十天のかせる俊才ゐく。歌舞吹彈の
道ハ人ゐ更なり萬ゐ技藝ゐ達せどとゐ更なく。実ゐ天上の菩薩ゐ如し
と傳聞大王〳〵后妃を需むんとなれど早く勅使を仙乘國へ遣ハして善
覺臣ゐ二人の女を迎ひとぞ勧もりける淨飯王渠が貌ところ我ゐ女ゐ
ち恍惚〳〵く醉るゐ如く。叡慮大ひふ動ゐ即時ゐ三大臣を召き。急いで善
覺臣ゐ二人の女を召上さゑ〳〵と宣旨ある。日光月光星光ゐ三臣紹命ゐ奉り

群臣の中其智才を絙綖し。無双の智臣巴津那と云ふ者を勅使と
して。仙衆國へ遣はさる。巴津那王命を奉りて金銀珠玉の聘物を齎
して仙衆國に著善覚臣が館舎に到る。此旨疾く仙衆國へ告来れと
王命何度やと。善覚臣八國人に觸さ道路を清浄せ自己官人を従へて
遠く迎接し。驛亭の餐饌善美を盡し。其後勅使を引きて館舎に着
敬て宣旨を待。巴津那臣等を正し。倫言の旨他の子細あらざ浄飯大
王萬衆の宝位に即き。とくどもいまだ后宮に具なる佳人を得ざる朝廷の
緒臣下是を憂ひ普く四天下を尋ぬ。一千五百有余の佳人を召聚。覧
備とくどもいまだ大王の尊意に補ふ夫人あらず。然に貴卿の令愛姉妹とも
絶世の風姿あつと。且才藝に秀で勅よ聞に達し。急ぎ入内せむ〳〵との王
命なりとて。勅書并に聘物を与へられた。善覚臣勅使の詞を受け心中大に
歓喜し。禮を厚して勅答しけるは是恐ある倫言なる。偏國の微臣が女。大王の
宣旨に預ると。旨亀の浮木を得たる天日を拝たるが如く。幸福何か是に過ん
や。然八あれど恐くは容姿醜悪。動止卑賤しく。徳覧に備るに不足却て龍眼を
汚すの悼あれど。達勅の科は畏多くも宜く辞退の義を申奏なむと告
る。巴津那推返し。縡遜はさる事なれども。姉妹の女の尤色園生に染る紅葉
の如く。更に世に隠なれでこそ。誓慮も茲に傾ひぬれ。王命已に下る上を。辞
もなう八却て非礼なり。疾く今宵に勅命の趣を傳へ入内の准備をなむと。強に
勧めれば善覚臣も。ものを固辞もなう恐ありと承伏し。其旨憍曇彌摩耶
乃両女へ傳へ。萬事准備の間。客殿に於て勅使を百般の餐應して管待
斯く數日の後入内の准備調ひぬれば。憍曇彌摩耶二人の女を十乃至八十七
室莊嚴の車に乗せ數百人の侍女童女に傳せ姉憍曇弥は馬将軍妹摩
耶は象将軍として。共に前後を警固せ。
黄道吉日を撰び仙衆國を啓行せ。広伽陀國の都加毘羅城さして

る。カ使巴津那ハ皇ホ先ラ〳〵都城へ回リ善。善覚臣王命ヲ領掌ー。二人ノ女
ヲ献ルヨー奏聞ーれバ。浄飯大王睿慮叡ー〳〵。巴津那ガ功労ヲ賞ーまひ官金
城外遠ク牢ー〳〵二妃ノ乗車ヲ兼テ新ホ官建ー宮殿ヲ繕ー。詔言ノ如
卒ホ數日與宴ヲ賜ハリ〳〵疲労ヲ休ーあれ其後暇ヲ〳〵ノ金銀綵帛ヲ与テ
本國へ皈ーまひリ。姫ー〳〵二人ノ妃ヲ睿覧ある。ニテ清浄殿ホ召見ー
初ク二女ヲ上覧あるホ。ホハ百倍勝リー國色ホク。三十二相八十種好ヲ兼具
将ホ二菩王ノ王芙蓉隻咲ふる如ク。何ヲ我捨テなれバ。浄飯王十ホ睿慮
ホ補ひ。歓喜ー。妻斜ヲ。姉妹ヲ宮中ホ留めらるれリ。宣旨有ラ
姉憍曇彌ハ月ホ翫ル〳〵月景城ホ住ー。妹摩耶ハ花ホ象リ〳〵青龍城住ー。各
ヲ夏より浄飯王ハ南北ノ堂ハノ御幸ハ稀ホ。東西ノ堂へハヲ交々御幸有
愛幸ー。ヲこと雙手ノ王ノ如ク。月景城ホ喜興ヲ促ー。ヲ日ハ破利遮耶城ノ
宮妃女官美ヲ。善龍城ホ鳳駕ヲ停。ヲ夜ハ巫那離城宮女侍官嫉ヲ。媚ヲ

衒ひ狂ひヲ凝ー〳〵。龍駕ヲ迎ムそなりる。浄飯王ハ二人ノ后妃ノ睿慮リ
補ハせヲホ就てモ父善覚大臣ヲ賞ヒ〳〵ホ有ラ〳〵。小國ノ王ホ封ー
仙乗國ヲ賜ハリ〳〵れバ。善覚臣大ホ
珍玉奇珠ヲそなふ〳〵。其余天下ノ宝ヲ集ー。七車ホ積飾ク自身ハ宇淸
毘耶離城へ上リ参内ー。龍顔ヲ拝シて封爵ノ天恩ヲ謝ヒ。七車ノ宝ヲ献ジ
れバ浄飯王睿感浅ラ〳〵ヲ。大與宴ヲ開ク妓楽ヲ奏させ重ク管侍ー
ヲ一城ホ家ノ面目世ノ名譽此上有ラ〳〵ヲ。見者聞者羨ぬハなく。四
天下ノ人皆花顔女我生ん妻ヲ〳〵願ひ〳〵

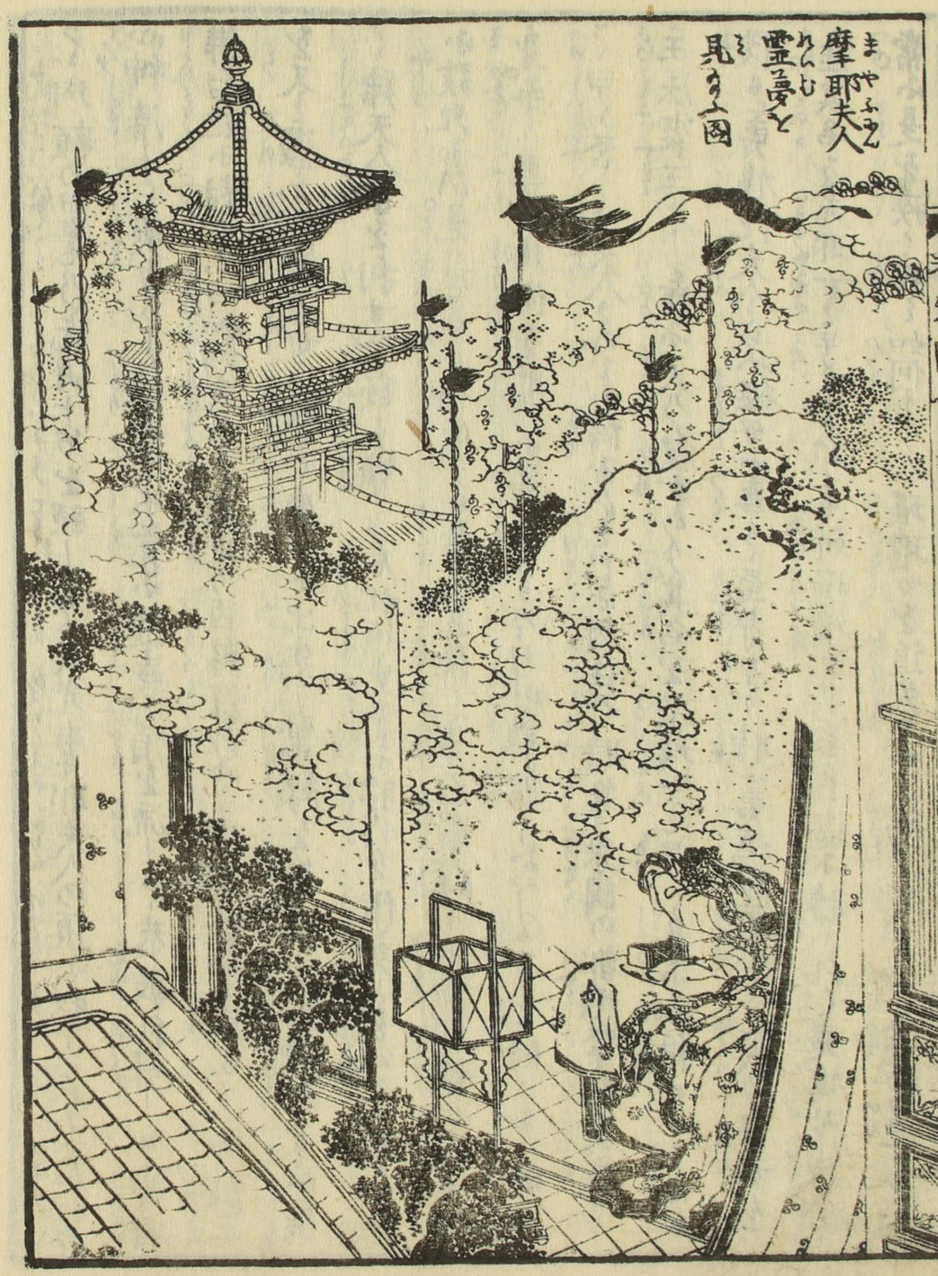
摩耶夫人臨姓

夫天地物ヲ始ヤ秋ノ月明朗ラ〳〵ん〳〵れバ。浮雲ヲ覆テ雲せ春ノ花
爛熳ラ〳〵ん〳〵れバ風雨ヲ傷ラ〳〵ヲ散ーね唯月花ノミなラ〳〵ヲ人間ノ上ホ
ラれて哂憂ひヲー。さるゆゑホ善覚臣ノ女憍曇彌摩耶ノ両夫人浄飯王

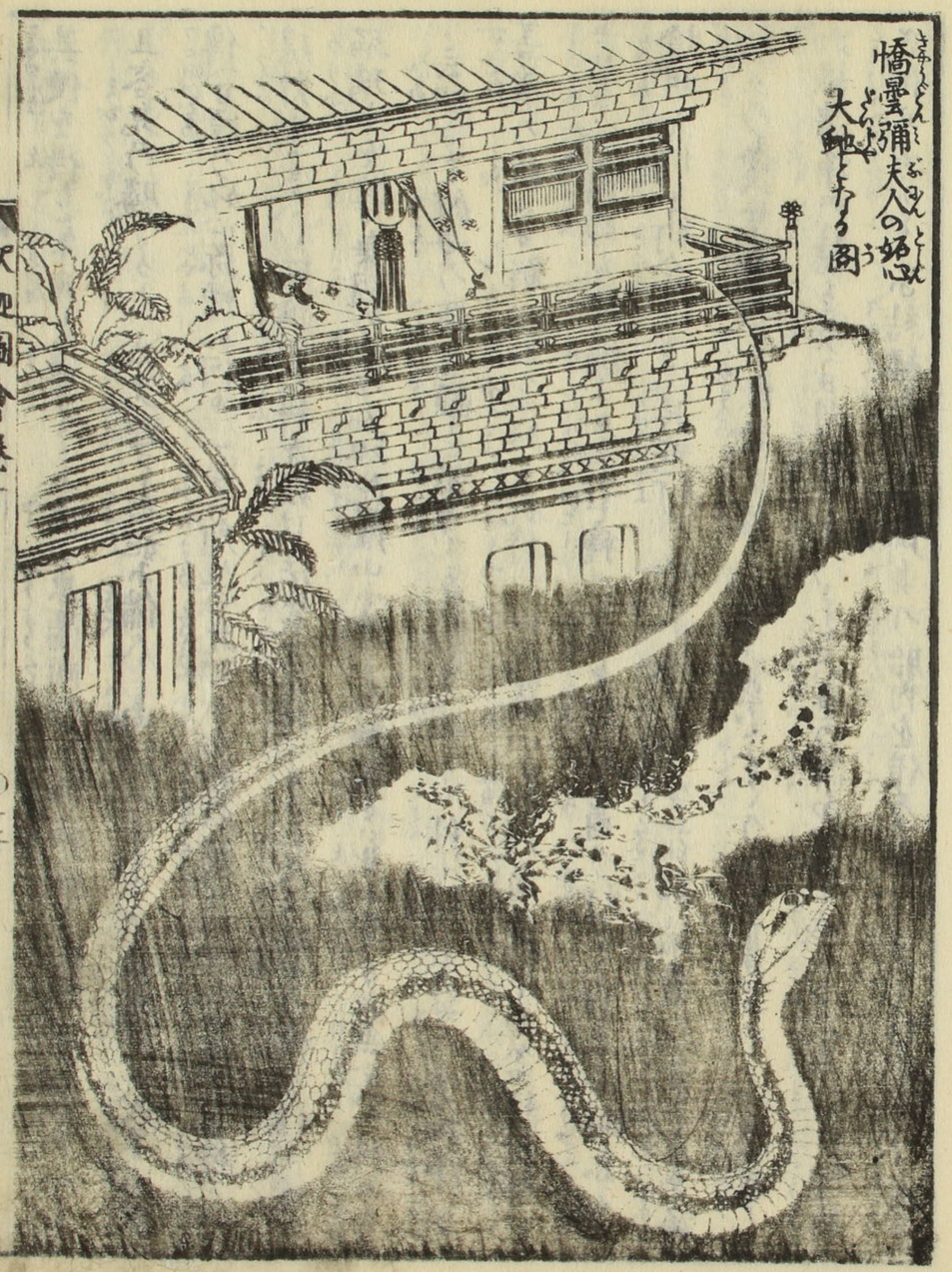
の愛幸厚きを望むとて足ることなし。願とて満ることなし。何ぞ不足あるよ
しうるぞ忽ち同袍仇敵の死を結び内心ふ三毒の劒を磨き支ということ
其濫觴を尋るふ姉妃憍曇弥夫人の心ふ六今般の勅命ふ就て入内せん船こそ
后妃ふ具り。摩耶夫人父母の紆へ辿さるべしと思られるふ寨の外姉妹ふも宮中
ふ留られ。そこ兼ての思惟齟齬し深く
思ひ。依今大王の宣旨下るとも固く辞して我顔
ふ姉と君寵を争ふとそを悪まれ
しく。大王の睿慮を傾んとの。御幸ある毎ふ媚を凝し情を盡せども。浄飯
王六四葉の宮妃の中ふても。特ふ摩耶夫人の色香深く。節操正しきを愛むひ
昔龍城へ臨幸重りぬる。憍曇彌夫人深く嫉妬の念我生ずおれ隙有
ば妹夫人を絶へ退けなんと思れるぞ薄情りる抑婦人の身ハ貴賤とふ
く嫉妬の毒念萌を時ハ無明り闇ふ迷ひ七百生の其間昔躰り蛇身と生

のごとく濃なりといえども俱ホ一睡残催ルがごとく忽ホ並ビに虚空ホ音樂きこえ摩耶夫人思ズを枕をやすめ玉殿より香ホふりきけんホ空中ホ紫雲ホ靉靆ルがごとくおびただしき其丈八丈許なる金色の宝塔雲中ホ顕ハれ其周ホ黄金の幡八流七宝の宝樹八本微妙無双の蓮咲出ヅり夫人寄異のおもひをなし尊ぶくも又怪と思ひ瞬もせざるホ件の蓮開くとひらく花の中ホ無量の佛出現ー金剛合掌ー微妙の御声を發ー異口同音ホ拝ミ戴尊嘉十方最勝佛無上覚哉光明無量尊衆生智願皆満足三身円満皆成就と唱へおわりて宝塔を入レ不思議なるホ宝塔の四面の扉自然ニ開ク其中ホ金躰の御佛端座合掌ーむひ妙なる御声を發ー我得成道久遠劫平等衆生一子地智願満足令現在到来結縁緒佛智と唱へむひて何國よりともなく忽ち六牙の白象吉蓮花を頂ク佛前ホ出来る其時御佛宝塔を出蓮花の上へ移り座ムひく御額の白毫の光明十方を照シ其光摩耶夫人の頂ホ映ルがごとく石妃の心神清く爽なること限なく不覚ホ随喜の涙を流し恭敬礼拝ー其時佛后妃ホ對ー曰ク朝夫人予宿世の因縁深ホより今此所ホ来る浄飯王を父と憑ミ御身を母と頼ミ塵土ホ出生ー魔縁を降伏ー一切種智を成就く緒天人衆を利益と欲を願ハくハ右妃須臾予胎内を借ムべシと曰ふ夫人大ホ不豫ひむ是ハ恐ある御夷ミ素リ五障三毒の罪深く不浄汚穢の婦女の身ホ尊ひ御佛を胎内ホ宿ーまつる事ハ此義ハ恕ーおハしまさんと辞ーまホ佛重ク曰ク否ーよ夫人さのみホ辞おひを已ホ因位の時等衆國の都城緊那良城ニ主法波王と申ス一人の皇女あり其名を瑠璃女と号ク並ホ幼稚ホーく母ホ後ホ夷鳩陀夫人と継母ホ事ミ至孝なり時ホ夷鳩陀夫人ホ一人の皇女を産其名を光耶女と号くれども姉瑠璃女其容色遥ホ勝れ夷鳩陀夫人ホ常ホ是を疾ミ妬ミ如何もーく瑠璃女を追失ハんと心ホ至孝の皇女あれハ

摩耶夫人霊夢を見る図



幡曇彌夫人の姫忽大蛇となる図



其便を得ざる年月を送りたまふ茲に東陽國の王妙莊嚴王瑠璃女の孝貞あるを且容見の勝れたるより殊に迎て后妃に備へ二子を儲く
傳へ聞ふ日頂の妬心弥増如何ともして五百所生の光耶女を妙莊嚴王の宮妃に備へ二種々の
謀計をなさんと瑠璃女の科を設け法衣王に讒じたまふ父王継母の讒を信じ遂に
瑠璃女を等無國の北なる切陀羅山に捨たり瑠璃女身に覚なき無実の科に其
と云明されど継母の罪を顕さざれば是非なく科に伏し実母の遺物浄光
菩薩の現ずる解脱血盆経を執持して切陀羅山に赴き血盆経千部を
書写し二萬部を続編して日々に七種の菓を捧げ三箇の灯をかゝげ心懈怠なく
燈明光佛を祈念したり其戒行の功力に依て今生花顔端嚴の身と産を浄
飯王の愛幸を得て歓楽を極めさせたり然れども経を書写せし功徳深く
六根清浄の徳を具へ五色の障を免れ身と成りぬ其時の燈明
光佛是なりとぞ結縁あれば今御身の胎内を借りたまふなり辞し申す勿

と統ひ給ふ影のごとく紆ふ近寄ぶ摩耶夫人を佛言をはさく感涙を流したまふ猶
辞しまつらんと双手を合しまふ不思議なるかな夫人の掌の裡より廿八葉の青蓮花生
出たり其時御佛白象の背を離れ夫人の掌中の蓮花上に乗移らせ給ひ微妙の
御声を発し我得成道今現在往来安婆八千度為衆生常説法已今
當来諸佛智と唱させ給ひ珊瑚の乳房をもて右の脇より影の如くに胎内
へ宿り給ひぬ夫人驚き我身を抱き足を五体六根清浄の盆
中ふ白玉を喪ふが如く胎内より明々紀金光明を輝し六根六識を照し給ふ夫人豪
逝とく心明るみ三世の因位眼前ふ見るが如く前生後生ともに前ふ佛の説のごと
一因位の昔絡も疑なく宝玉事なる喪を悟り我ながら不思議ゆゑ右ふ記事あ
と感歎一ふ其時六種震動して恒河沙の菩薩諸天各来現し給ひて讃礼
佛母除難守護諸佛證誠と円音ふ唱へ夫人を礼拝し給ふ右妃大ふ歓喜
勿躰なしと恐縮して拝せんと給ふ忽然として夢覚たり此時浄飯王の眼を

覚一稍歎息呻唫ーおひそろが心を収ゝ后妃を対ひ朕今奇異の夢を見ゝり
玆ふ今卿が顔見を見るふ平日と異ふゝ真ふ天人の如ー不知卿も夢を見ゝや
否やと問ふ是ふ依ゝ夫人包ーなく夢想の始終を語り淨飯王大ふ歓喜
ーむふ起ゝ夫人をお拝ひ朕が見る所の夢も正ふ斯の如ー是緒天朕ふ太子を授
ふふ疑をゝゝ慶感ーふゝ限をー

摩耶夫人

勅ゝ摩耶夫人を其聖旨より身の重ね事を覚むひられ給夢想の違ざる幾感ー
起居飲食を慎をむふぞ淨飯王ふ奏ーゝ舞歌吹弾をそゝり緒般の技芸をさせて旦
胯脉怠ーなど緒の女官婇女ふ命ーゝ多
夕夫人の意を樂ーめ慰ひ申ひられ給ふ普龍城の男女傳官烏将軍夫婦をちゞ多
婢女下官おいゝるまゝ悦ゝ限ゝく太子の降誕を待ゝと皐ふ有をこが如ー此摩維
ふ告ゝゝ月景城ふえられむさゝねぶふ噴嚏の痛ふ胸を焦ゞと憍曇弥夫人大りふ

孩ん心中焼ぐ如ゝ妬心日来ふ百倍ー妾已ふ大王の寵愛妹摩耶ふ劣ゝる上渠早く
王の寵を身ふ在ーん太子降誕おゝ
ん是ハ朽惜や如何せんと錦帳の内ふ倒ゝれ憂ひむひられ給今ハ愚ふ絶ゝく傳官
馬将軍ふ近ゝ招て曰ゝハ頃日宮中の風統ふ普龍城の摩耶ゝて皇子を嬰妊
ゝゝ大王の覚めぐゝゝ百司百官の尊敬重ーゝとゝ其事実事ゝゝ渠安ゝと
皇子ふ産ゝ必定后宮女御の宣旨を傳ゝ止ゞね驚の挙止をゝー盆ゝ茂如
ふー朝廷の緒卿ハ申ふ及ゝ末ゝの民市ふまゝ妾を偏り怨ん後指を指れん
いゝゞた此身の恥辱ゝゝ所絵頼ゝん世ふ存命ゝ身ふ憂支をひん人ゝん速ふ自
害ーて黄泉の人とあるべん大王を俄の患病ゆー死去ーと奏せー妾宿世の戒
行拙ゝ非命の死をゝとゝても一念ハ霊鬼となり摩耶も皇子も妖殺ー大王妾
の苦脳をん世ゝ今の恩を晴ーん努ゝ此言を人ふ洩ゝ支勿ゝゝ憤恐の泪
と俱ふ堪ーれゝゝ馬将軍悶然皆時黙並ゝて言句も出ゞ在ゝゝ稍有

ず心成鎮ち色改正しく曰卿憤りの旨理至極ふれ去なから御自害あらんを
出ろべしとも摩耶夫人嬢妊おりしゆまだ皇子と皇女とも定めらざれ若御死去の
後誕生の皇子皇女ありとて命を捨ずけ甲斐なしと甲乙ろんの臣が浅見およべ摩耶
夫人の出産成妨ふれ如何らむとも已ふ臨月を過ても降誕なくて必定患病なり
と大王医官成召して薬石成調進させられん其虚ふ乗じて隙ふ脉の薬成用ゐる
なりと孕ける所の皇子ふもあれ皇女ふもあれ血ふとらんと何ぞ疑うべきや並て
後君大王の睿慮を煩はむふ妹夫人の寵成奪ひむふと何ぞ難らんとの幻を盡
てで諫めるる嗚曇弥夫人馬将軍ふ諫の幻を容く眉を顰めるる婦人子成孕て
十月を待く出産をる吉祥常なり然るふ如何なる術を以てう其道を塞ぐ
べきや却ぐろげの吉をなく萬一露顕をる時ハ犯罪の科免るべきとも你妾が死
を止んとく正なる虚誕をう吉勿きと難ぜらるふ馬将軍兄ふとうふ深国の
内ふのと在く世上の吉成知むひで疑ひむふ理なり茲ふ仙乗國の良ふ宿陀山
とう山のふ其山の嶺ふ行ひをる甘神仙あり名成阿闍部仙人と謂り曽く金毘羅國の
王の意ふ従く吉あらく斬罪せられんとる阿闍部仙人の二人の従弟猶彼山ふ
栖ふ其名を儀伯仙無間仙と号二人ふも師の秘訣を傳ふ神通自在を得風ふ乗
雲ふ駕し奔歩を倒し飛鳥を墜ふ事掌の物を弄をるが如く召を要ひて舎ふ
主成煉く人となりの妙術あり君彼二仙人を召ふく計巧を需むひ摩耶夫人の生
産を妨人吉難くるまじくと言上しれば憍曇弥大ふふ歓喜あり若告所の如く人ハ
妄まく何成ら憂ひん急二人の神仙を結招せよく命ぜらるふ馬将軍領掌し退
く腹心の者ふ密ふ意を云含宿陀山ふ遣ハくる夏ふ依く使者夜を日ふ継ぐ仙乗國
ふる宿陀山ふ到り儀伯無間の二道師ふ謁し馬将軍が密意を告れば二道師一
儀あも及ばず承伏し直ふ栖を起く使者と倶ふ縮地の法を以く不日ふ迦陀國月
景城へ来着ふ馬将軍大ふふ悦び長途の疲を労ひ後堂ふ結ひ種々餐應して
後人を退け密ふ女主の憑の旨趣を細り委ぐ儀伯無間ふ告く曰夫吉手間の

義なりなど。尊き夫人ふ拜縋て其半段を言上ーゐるより。馬將軍十二人を率て橋雲弥の御前ゟ出斯と通じゐれど。夫人錦帳を出ゝ二道師ふ對面あり。先ゑゝの珠玉財帛を賜ひ偖摩耶夫人の生産を妨ぐべき術を需らる。儀伯仙ゐ曰倫言ふ敢ーゐ妨戸の御場爭ひ違背ーゐ去なゝ。我ゐ仙術の中ふ呪咀調伏の法ふ七壇の品のいと就中妊娠の道を閉塞ゐる容易の事ふ非ず。其妊婦の面見を眼下ふ見ゝ其姿を写生ゐり。形代を造ゝ是を土中ふ埋ゝ四箇ゐ壇を築ゝ秘法を行ひゐべし。終ふ出産の道を塞ゝ。年月を重ねゐも胎子降誕ゐゝ。雖然の内ふ成長して母子ゝも命を亡ふゐゐゐれども其人を見ゝれば法を行ゝと雖ゐどゐと言上ゐ。橋曇弥ゐゝ大ふ悦びむひ。妹摩耶を此宮中へ招ゐ寄んといと安ゐ事なり。並ゐゐも顕ふ道師對面あって容見を写んとせゝ。左右必ゐ怪ゝゝ禍を生ゝ。夫人唯人ゐれゝ。翠の内ふ潜居て其形代を造りゐと命じむゝ。両仙人ゐと承伏ー。其ふ御前を退ゐり。橋曇弥ふ女官ふ命ゝゝ摩筆をゐり寄即時ふ妹夫人を招寄ゝゐれ消息をいと長ゝと約巧ゝふゐも緘ー

く書をゝゝめ心利ゐる女官を青使ゐて青龍城へ遣ゐれゐ。噫呼淺猿ゐふゐー。も親ー紀骨肉同胞ゐ姉妹ゟ君寵を爭ひゝ忽ち仇敵とゐり。ふ毒計を用ゐふ至ゐるゝ偏ふ嫉妬の悪念のなゝ所なり。恐ゐゐー慎むべー。斯ゝ文使ゐ女官青龍城へ到りゐゐゐゐゐ一通ゝ乳ゐ烏將軍屑ゟ讀めゐ。是ゝ近月景城當ゐり音物消息を呈ー事ゝゝ事哉度ゐり數を知ゐれゝ。一度も聞親ゐゐゐふ俄ふ文を齎ー越ゐゐ。其意得ゞも悪ゝゐ。女王の姉君ゐ消息なれゞ步を停置人ゐゐなゝ。使女伴ゐー摩耶夫人の御前へ出斯ゝ到達ーゐふ。夫人を夢ふも姉君の姪を知ゐゞ御嬢妊を祝ーゝ御使ゝ聞ふゐゝ御悦ふ淺ゐゞ御消息ゐゝ三度推戴ふゐ烏將軍を顧て曰ゟ又ふゐ烏將軍ゐ未ふゐ姉君ふ隔意もゝ果ーゐる御文賜ゐゐゝ怡悦の色ふあゐれ頻ゝ文井ー閲ふ續ゐゝ。ふ素り深ゝ巧ゐる吏なれゞ筆ゐ步も濃ふ是ゝゝ數度音信ゐゝ門絶ゐ中ゝ裂んとゐる者ありゐ。一度も妊ふ達せゞ却ゝ此方ゐ事を悪ゐゐふ養聞ありゐ

なんと御身の妻を綾言をもて顕れ其人を追ふ入待りぬ
くれなゐ夏方とり度々進せ一消息も彼曲者の妨げまく声絶へ通くとく推
量りぬ鬼おも角も人の妬むり薄情おりとと手數れ笠もれ風のまもりく
君ハ貴須を孕むりよ一妾が嬉一さハ物數なりとお國の父母の歓喜推量れ頃
ふも恭り悦び祝せるりく思ひへるも恥労患おるづん意なりとも文をて妻問進
せぬとも婦人の身ハりの大妻と安一中るとく心苦なを難産ふ有と一安をそれを
乃と思煩ひ昼ハ終日飯を耳おなど夜ハ終夜ふ夢も結むをおれ願りく八一度此方来
りむへ一なつれ顔をを見胎孕りさ多ふ成も全まおりるんとも城一やふ書をいけ
なれど夫人余りの嬉一ふ涙を流一むひ操返一ほ一ちなるり鳥将軍ふ對ひ姉君の
消息ハ父母りの文ふ異なりを斯すく情深く仰越ふを恭ねハ不孝なりとそ久く姉
君ふ逢をまくれだなつりくも限なり急ぎ参内りく大王ふ奏向に勅免を蒙りた月
景城へ参るれ准備せよと仰れだ鳥将軍承りの仰さる妻ふいへとも御妊娠の御身

を以く路上遠く月景城へ赴れむ名ふ御慎かれふ仰う。橋雲森夫人の御恵被
ふくさて大妻と中程の妻もゆぎ御伏復あくんを待く此方へ旅立を足一ふとても
遅くるまじくい唯其旨使女へ仰聞れ御發駕の義思止りむへと練れるも敢て
許容なく否とよ妾胎孕なりとの心りを少くれ表平日ふも勝りう参ふ姉
君の命ふ背れ此方へ着ばまんハ姉妹の私ふ違一り早く奏向ふとり月景城へ参る
る准備せよと曰ふ鳥将軍も王命再び背ぐ。遂ふ領掌一く参内一夫人の
願りの旨を奏聞一れだ浄飯王睿聞あり左も右も夫人の意ふ随ふ一と宣旨有
是ふ依て鳥将軍退出て立回り勅許の旨聞報るふ夫人斜なこ歓喜ふひ
文使の官ふ数妾の財帛を賜ふく先へ回され備月景城へ贈物ふそ一種々
の珍宝珠玉を三車ふ積載其身ハ美蓉冠ふ頂れ繍衣を穿ち従者を被影鳳
輦ふ乗一音龍城を出むへだ傳官鳥将軍ハ馬上ゆ一前駆一数百の婇女ら迄
彩ふ車ふ乗一後従一其余の輩ハ路上妓楽を奏一外夫ハ前後を警固一つ

月景城を臨ぐ〻せる國王の龍姫摩耶夫人の行装なまめ
其花盛なるに愉人方々遠近の貴賤老若路に充満〻
錐の地をも殘さぬ野〻〻〻更どもなり月景城が使女の間報に依〻橋曇弥
夫人針巧已に成りと大に怡び城外遠〻官人を出〻摩耶夫人の駕を迎〻
内へ請じ入る摩耶夫人の御身の危に臨み氷を踏〻水を渉〻
夫人をも危難を知むが為女官の教導まに隨〻玉殿に入給ひ橋曇弥
〻姉妹絶〻久〻に對面おうふて妹夫人八年来なり〻姉君の顔を見給ひ
平伏〻礼をなし別〻後の委情或は嬉涙ぉ
同胞〻〻〻此都城へ召迎〻くも起居を倶にせざれば朝夕なれむ
折〻の消息さへ人の為にや隔られしが遠慕心通〻今日来給ひ〻顔を見る嬉
〻きよ其をさ〻〻〻〻置御身ハ〻〻〻貴胤を宮中に孕み
ぅ。上二人より下萬民の悦びまさに古郷の父母も嬉ぞと推量られ妾が

心ういさ〻察〻給へ疾ある祭り〻賀ぬも述まかね〻思なり。身の労煩の為
ぉ妨られ心なりとも默止ぬれど無見〻。胎妊の甚成事に心安堵を
平素なりね御身を労なとハ知なり斯ハ結び進〻せねぬ。〻〻〻萬分憤〻安
らかふ皇子を産〻〻〻せ玉へかんと巧言ぉ云〻ら、頓て珠玉の盃をもらね
山海の珍味を饌〻酒宴を催し。緒般の妓楽を奏させて宮侍多勢
烏将軍ハ橋曇弥の心中其意得ずと始より疑ひ思ふれど。若鳩主母を用ふる
ぅ〻やと此事心を纔さぬ礼儀を名と〻。酒食とも盡く共姉夫人ぉ勧〻後
我女主ぉ勧む。其誠忠至り盡と以ぃる。如何せん天眼通を得ざれば。橋曇弥が
奸計酒肉の上ぉ〻ぉ。却〻傷なる
人の形見を。未練と〻造写〻。呪詛の形代と共を為を知ざりなるぞ是非なし

儀伯無間呪詛摩耶夫人

斯〻數剋の游樂ひまぉ。二個の外道ハ思ぃ侘ぉ后妃の容見を造をぉ。潜ぉ

橋曇弥が其旨報じ、それぞれ夫人心裡が悦び、捌後の東閤それぞれ盤を取て別厳
が妹夫人ずび後に来、女官を率ゐ、其翌日亦摩耶夫人が對面し、斯く身
を數日留まり、それども君乃眷慮も量りそれだ且先青龍城へ回りまへ再び迎
もし。妾もまた恭しく妻問進をだーとやされるふを。抔とぶ妹夫人の餘波に畢ぶれど俸
飯王乃待ぴ申ん支を思召く。再會を約し別を告ぐ青龍城へ飯りまひるあ
そのあと
其後ち橋曇弥が急が両道士を招れ害いわや両人妹夫人が形容我写し取
たりやと尋問ふが儀伯無間ふとり顔が答ふる、故后ずーの意を労し更勿
き遊樂乃間が委く写とりゆく其形代を出し。橋曇弥夫人是嫉えとく
が其面貌をふく怪しく忌ひ、それども。其故奈何と
と問ふる両道師が曰。是道家の秘法ぁく。面頭を半茉を月中の水を取て洗ひ七
度然して後、教とをーく是を造り五躰が羊茉藻ぬく東水火木金土五形乃串
ぬく接合せ。青黄赤白黒五色乃縑ぬく是を捲。頭が箭ぬくせいかり。此形

代が百八十根乃釘を刺く土中が埋く秘法乃供物燈香花具へ丹誠を凝ー祈とい
む胎子成母親の骸骨が捆者。數年成ぬるとも出生とる事能ぎ遂が八母子乃命
成断人事疑なーいとさも誇ふ云ふとぞ急ぎ調伏の
術を始いと命ずる両道師領掌ー地後を考ず土中成堀こと七尺、件乃形代
が百八十根乃釘を刺く是成埋く。其周が四箇乃檀を築く東方を息災檀と号
西方を敬愛檀と号。南方を増益檀と号。北方を調伏檀と云。偖祈乃具ふを木
成乃花を華髪とり。白蜆乃膏を浮水が港へ燈火が蝦蟇乃油を洒ぎ焼香金香
が豺狼乃骨成焼。四方が三尺乃白双を立其余種々乃供物を供じ。儀伯無間乃両
人髪を乱ー跣ぶかりく擅が上り。天血妄地血妄業妄七徳七性五形五位内縛外縛
屠所の法業縛盤若拼無明乃印種を乃秘鈔を尽ー。肝膽を砕ぢて祈とくぬ
ぎ是ぐ為が欲界色界の悪鬼邪神。薄気乃悪霊を残して調伏乃壇上壇下震
動ー。護摩乃烟黒雲乃如ーと上り恐ーとぶも疎かり。儀伯無間乃両道士ぶ

奇特を顕りく益岡の無息災檀の儀伯迎へむ。敬愛檀の無間に向へ調伏檀の儀伯を互に周り廻りく。黒汗を流して祈る所の俄然くく大地鳴動して埋り形代生るが如く地中より現れ出さも若りけるの音叱怠を吐宮中と睨視く衝と八身の毛も堅く恐りく九宮中の八橋曇弥夫人兼てより呪咀の始終を見やりて居むひくるの今調伏の形代已と現き出りく文官の命じて羽翼を

きっと捲上させ挿眉を上くく形代の向ひ如何や摩耶夫人你姉妹の礼を知なたくく大王強く留りもの聞く絆りく父母の國へ飯るの死さへなくて色を衒ひ媚を巧むく君電光貪りの至るの厚恩を思知ずるっと罵られむぐ形代も恨めけるの声を發りく生女素り姉君と栄利を争心あくれぐる君の宣旨を如何せん並るの妻が皇子を胎妊せりく親り兄同胞咒咀りむ恨りさよ。そ因果を車の輪の轉るが如り。悪報御身の臥せざるの早く心を善道の離り。道士を退けむくと其面皃其音声摩耶夫人と露

違されむ傳居るの數妻の宮女面伐羅刹の身を增ず。戦慄まどとの者なりざれるの橋曇弥八地くも怕ずあるの忌々しの言の葉や姉妹の縁も是限りやよ道師の如何成就の貴伐言ひを夫人重く其功労を賞り種々の御前の出調伏成就の暁ハ金銀縑帛若干伐賜ひるふを両道士大の悦び深く恩を謝りく宮中伐退出りく馬将軍を辞りく別まるく月景城を出るの不思議ありるの多忽ち大地月裂と裂儀伯無間苦と叫と隼りく地中の投りるの地八旧の如く合して両道士八終の生方ぐるの奈落へと沈没りく子伐呪咀せり眼伐緒天の罰りを

佛菩薩の再誕ある皇子伐恐るるの事ありと心ある人八身伐慄そぞ恐るる

摩耶奇病并夢中説法

儲も摩耶夫人を月景城より青龍城へ送り
會〻ゐん作りの詞を綴と思食悦き限なく将ふ秋風の雲を拂ひ明月の幸
が如く平日より心もと〳〵思召々ふ或夜忽ち無量の悪鬼外道空中より降
り来り千條の縄を以て摩耶夫人の五躰を縛ふそれ
とも手足働くぞ叫ぶとそふ声出ざれど只是一場の夢まぼろし御身
き悩きたまへなと強く一声あれと叫むへだ悸然として俯
八錦帳の裡ふ即残燈細々とそ瞑翠そふ風ふきそふ化傳の女官八熟寐して
即ち夫人胸撫下し儲夢なりとそと猶心を安んじ給へども胸の裏ハ猶止ざる五
躰骨肉疼痛し邪熱身を焼ふ如く神心悩乱しそれ女官たちを呼覚しむれど薬
湯或ハ口に咽残涙ふ流れ出ふ程ふ夜ハ漸ふ明それども起ふ人気力もなく
唯錦の褥の上ふ衣ふ被く伸卧ふ左右の女官八夫人の平素ふ異ふ体ふ驚

急ぎ烏将軍ふ斯と告ぐれば聞ふ大ふ驚き即ち宮中八弛張り后妃の枕頭ちか
く寄其容躰を問進ふ夫人ハ苦げふる声を息の下ふ引入前夜ふ夢ふ吏
を語る烏将軍練ふ白ふそれ夢ハ心ふ乳ふ疲労より出ふ所ふて姫ひふ是ふ繋ふる
ふ君皇子ふ胎姓せむひ起居ふ意を労ひむ其疲労凝結ふ自然ふる奇ふ
夢ふもふ人ふもふそれ人倫の胎ふ宿ハ天ふ応ふく月満ちふ皇子安々御降誕有
人更ふ何ふ疑ふそ唯心強ふ思へむと云ふ御ふ医官ふ召寄薬石を調剤ふ奉ふ
奉ふぐれど夫人ふも烏将軍の約を実ふく思召湯薬を服ふ神心を鎮ふむ
骨肉ふ疾痛ハ隠ふそふて摘止ふ是ふまぐれ胎内の皇子時ふ動ふむ〳〵覚へむ
ひふも悪夢ふ後ハ女ふも動ふむぐふ心ふも空ふなりふく然ふ放心せ給ふ言語ふを
發ふもふ唯ふそふ絶ふる心地ふむひ朝夕ふ飲食ふも動ふむぐふ昼夜深閨ふ悩伏
動ふぐふ烏将軍夫妻大ふ心ふを痛ふ朝廷へ斯と啓奏ふれど浄飯王大ふ驚
慮ふを強ふむひ即ち宝蓋ふを回されふく青龍城へ幸臨ふむひ后妃の帳内ふ入て

其容姿を覧ぶるに一の程ぶ大いぶ憔悴し玉ふ躰ぶ愈天意穏かならざる徴ぶ
て病を問慰ぶ入る官ぶ勅して普く天下の名醫を召聚ぶ后妃の為ぶ所有良劑
を調じまゐらせ或ぶ高徳の道師婆羅門を招ぢ病即消滅の祕法を修せしぶ
針を盡し快復を需ぶむべきぶ是そと思ふ効驗あることなし浄飯王ぶも又
と朝廷の群臣ぶも百國の小王ぶも后妃の父母善覚王夫婦の憂愁浅らず
と民間あまねく遍く患病平愈ふの白子あるを延生しぶと心ぶ祈
ぬ者あり雀月景城の橋霊跡の地ぶ暗ぶ悦びむひらぶそ浅猿ふうぶ歎く宴過
秋もすでぶ十月の月も満ちぬ今や皇子降誕あるし浄飯王ぶ告ぶ
城へ使ふれ容躰を問せむとぶも其月も空く暮十二月
ぶも其妻なれば上下色ぶ失ひ再び天下の良醫ぶ尋ぶ醫療手ぶ盡さ
せむとぶも曾く其験なく遂ぶ其年も暮あらむの春となり和月弥生ぶ日ぶも
愈御産の妻なれば上一人より下萬民の歎ぶ大なるぶそ増く況や摩耶夫人の

御歎ぶたとへなく御腹のく脹ぶなり増るのみぶく早十五ヶ月を過ぬれど臨産のケ
ぶたり只息喘く心苦しくのみ日夜ぶ添く居起をるぶ意ぶ任せざれば錦帳
の内ぶ歎ぶ洗く紅涙ぶ枕を拭ひむひるぶ余りの苦しさぶ思ぶけるぶそ過
ける年の春の夜の夢ぶ妙なる佛菩薩の示現を蒙ぶ天魔破旬の障碍
なく斯身を悩を煩なりるるの残さるぞして世ぶ難有夢ぶてしふと悦び
君ぶ告又女ぶもそのあげ皇子の産を出ぶ祇千年ぬる心地ぶて待るとの
ぶや斯行年月残重ても降誕なるぶ
なく倶ぶ恥ぢ給ひぬ扨ぶも思ひ
ぬれど如何なる鬼畜を産ぶて人笑ぶやなるらん是ぶ思ひ彼を想ふぶも生く整
ふいふ事ぶ愧を入りく王緒の断より難面命よおぢたる身と歎の余りぶ
おくれ妻くうぞへくく泣明し泣暮しぶよぶそ羅綾の袂乾く間なく錦繍の衾
も色うる紆ふくえさせむひうぶ並るぶ或夜過来しく我思ひ出深く歎ぶ耽

心倦疲おもなく睡眠むさぼるを勿恣ち胎内より大光明輝を異香薫じ
過ぎし年夢ふ示現しむ吾菩薩珊瑚の乳房を掻ふ胎内より五六歳の
ごとく忽然ふ三十二相を具足せし玉の如き嬰児となつて現れまし微妙の御声
にて宣ふや母夫人せつむへ御身の苦悩の余りを予が御腹ふ孕まる成天魔
破旬の障碍ふと疑ひもし更ふ是迄の中の遂なる我若も天上の楽境
を舎て人間界ふ生死托をるも一切衆生の頑愚を憐ふ生老病死の大苦悩を救ひ
正覚をとらせん為の大願なり何ぞ悪魔外道の如為なるべき再の嗔恚ふ倶貶
却の善根を焼捨て更ふ是れ人畏ふ三箇の徳あり生類勇億の中ふ人倫と
生まれ更ふ一箇の福なり人倫の中ふ於ても勇の道理を知身となる是三箇の福
なり勇の道理を知ふ於ても能其深理を知ふ至る身となる是三箇の福なり
是を人倫の三生と綴り此他世畏ふ十定の掟あり縦くは世なし人生ふ、
其身尊而勿捨賤
其身智而勿捨愚
其身修道勿毀悪人
其身富而勿捨貧
其身盛而勿捨衰
其身倦而勿捨不肖
其身臧而勿捨偽
其身明而勿捨暗
是十掟八古れ世よりの掟ふて國土の十因とも綴り此理を不知て肆なる残人非人と
なり夫人をも捨る所なり抑御身と姉君橘雲弥と七百生が間の仇敵ふて惑親と
なり子となり或八姉となり妹となり或八主臣となり或八敵となり恨残結こと言絡
のおよぶ所おおくぞ其一端をいそ。先年夢想ふ綽り等乗國の法妻王の後の后妃
夷鳩陀夫人即ち今の橋曇彌夫人なり生残要く今姉妹と生倶ふ此都城ふ留ま
られ浄飯王の愛幸ふ受る身となれども御身八過去の戒行いさぎよく紀ふ因て王の寵
愛深く姉妃八因位の悪報ふ因て王の寵愛薄し是故ふ平素ふ嫉妬の悪念
絶ず皇子膿姓と宣えしより嗔恚の劫火愈熾ふなりく其身八月景殿裡ふ

在なが一念の妬心八十六丈の悪蛇となりて虚空の裡ゟ翻満し天地の悪鬼を招き日月の光を覆ひ其上儀伯無間との三人の道師を招き言ひ合せ御身我月景城へ迎へ簫中ゟ彼道師を除き置御身ゟ形代を作らせ咀祠伏乃始ゟ出産の通を塞ぎ根本なり其呪咀の法と縛む造殺し形代を土中ゟ埋め緒の冥道無數の邪神を驚し大恩忘恩忘の邪法をなさ人倫出世の門を七重ゟ塞ぎ内縛外縛業縛の秘法をなさ又母ゟ受る三百六十余條乃血脉を母夫人の四大乃骨ゟ搦者磐石無明の法をなし日月の光を覆ひ是なさ数年の月を重れども産出を知道なし然ども子ゟ神夕自在をなさ降延せんを安れども猶雲踊の妬心益熾ゟなりて嗔恚の劫火の為ゟ我と我身を焼亡し独者の悪念滅る期なく生を世を御身ゟ纏乃恨をなすをもて御身ゟ其障导の為ゟ佛果を得ず夫故ゟ須臾其綿伏ゟよる出産の期を延をゟ姉夫人の悪念を永く断ち却く大道心の善女と

なさ人方便なれど心苦くて今女冏ものびおいまは彼呪咀せし二人乃道師ゟ天神地祇乃怒ゟ纏已ゟ生なし地獄へ墮落し無量乃冏責を受く菩患女冏申上冏なし然ゟあれども菩薩の戒行ゟ子ゟ寂もる者とくも憎捨る夫なく却く彼ゟ愚昧ゟ己が罪已を責る発憐む更深し倹く憍曇弥夫人ゟ悪念消滅乃期を待子世ゟ出生し難行苦行乃功徳積成道正覚を得至来作佛乃時節ゟゟ必ず彼ゟ冏責乃苦患を救ひ佛果ゟ至らむ唯何夫も因果の道理ゟく悟る冏を維ゟ好し維ゟ悪むる日ゟ朝ゟ出く夕ゟ没し月ゟ望ゟ満く晦ゟく春夏秋冬乃四序易く押移り火乃熾なるも久く燃る夫能ざ水乃溢るゝも暫冏ゟ流落なし人増て人間乃命の不定なる夫是ゟよりも猶甚く花を折く日中ゟ置ゟ如く我許冏乃衆一たこと得ざる此理をよく悟り無常を観じ亜母夫人今金殿玉楼ゟ傳ゟ錦繍羅綾ゟ纏ゟれ栄花も只是春の夜乃喜ゟゟ終ゟゟ楽尽く愁生し閻浮の塵となり亜一生ゟ並で早く愛着の紐を断一心ゟ

佛景を願ひ一佛淨土の基を乃上三明六通を具足し〳〵無爲の快樂を極め玉へ心と
夢ゝ思ひ玉へと先訓り統一支淨飯大王をも維摩の徳ゝ
ゆゆ人ゝ告ゆく憍曇彌も〳〵月景城ゝ奉仕る男女悉く刑ゐねど〳〵盆ありて八御
身の子ゝ其罪七百生を往ゝも戚をる期あり〳〵ぞ努ゝ此絨を忘まこゆへあそも親
とかり子となる支梵天下ゝ糸糸無淨海の底ゝ沈ゝ〳〵針乃孔を通をこり猶得ゞ〳〵
ゐ契なれゞ御爲悪くハをゝひゝ〳〵と懇ゝ統法一玉ひ亦小女なる卽手ゝく胸の
間ゝ猛開ゐ胎内ゝ入せ玉ひり其母摩耶夫人を年来の病苦旭ゝ霜の消るゝ〳〵
心清ゝ〳〵身躰初ゝく健ゝをりゝを覚へ玉ひ偖も〳〵難有御支うゝ余波惜ゐ御支
うゝ〳〵自已胎内を見玉へゐ光明赫ゝ〳〵胎内白王の如ゝ透徹り先ゝ出現玉ひ
太子千條の絲ゝ〳〵搦着られゐゝ乳房を含ゝ〳〵在せり夫人見をゐ玉ひゝ落涙両
乃如ゝあるいはゝやゝ夢ゐ佛菩薩の汚穢不淨の我胎内ゝ入せ玉へこそゝゝ
憂苦をゐまする恐多ゝゝ我ゝ御身を抱ゐ玉ふ事ゝ泣ゝと思ゐ〳〵悔玉へと

〳〵夢覚ゝり大人思ゝを摧乃上ゝ起をり女阿忙〳〵ゝ居玉ひるゝ躰玉
夢乃中の支ゐ思ひ計ゐけ玉ふ始ゝり終玉ふ太子統法一玉ひ一旬も忘玉ふ支
なく暗紀一玉ひ猶眼前ゝ見ゐる如ゝなれも偖ハ妻身乃起居苦一ゐ玉ふ先年菩
薩乃胎内ゝ宿ゝ玉ふと尺〳〵天魔破旬乃障碍ゝやと疑一りゝ〳〵示現を蒙り
〳〵ふこそ唯思ゝ計を恐一ゐ玉ふ姉君乃嫉ゝり今〳〵ゝ思へ心月景城ゝり眤ゝ
我程なく世ゝ恐一ゐ玉ふ姉君乃嫉ゝり今〳〵ゝ思へ心月景城ゝり眤ゝ
苦〳〵くのゝかり增りゝハ彼二人乃道士ゞ呪咀一ゐる驗一ふことゝ思ゝ玉ふ身も堅ゝ
心寒〳〵ゝ且我身有ゞゐゝ玉ふ姉君ゝ〳〵ゝ悪ゐ御意も出来一ゐ〳〵ゝ身へ姉君の科ゝハ
ゝと自已ゞゝ一服ゝり夢の中ゝ統玉ひ一十定乃掟の中ゝも因景の理を知ゝ
他を恨む支なれ〳〵の御ふこそ雖有ゐ將孃一ゐハ姉君の心を和ゞ却ゝ〳〵大の道心乃
善女ゝ成玉ひ期を待ゝ〳〵世ゝ產出んと宣へゞ玉ひ遂ゝ平ゝ白王子を產ゐゝ〳〵ゝ疑ひ
なゝ〳〵ゝ夢想を蒙り一上ゝ亦何ゝ〳〵ゝ歡喜踊躍一玉ひ支限なく〳〵これ

今まぐの患病餘波つゝ愈〳〵と健ふなりぬひ朝夕の飲食も勸こゝろよ
なくもぬひねまゝ菩薩の誡を心ゆるすまじ夢裡の妻子も戒敢〳〵口外せぬ
傳うの女官そゝうの烏將軍夫婦も。菩薩の神力なりを所に六芸ふもこゝろ。唯是醫
療うの功驗なりと思覺こと誤うと各日來困ゑー心を安ん〳〵王宮へも此旨啓奏なー
浄飯王も安ー〳〵と聲慮を安ん〳〵ぬひ頓おまき龍城へ臨幸おつゝ夫人お對顏ー
ぬひ患病平愈祝ーぬひ猶も保養を加るよう勅定おりく還御なーぬひり。烏將
軍夫妻ハ后妃の患病忘り多ハ上ハ必定迫れお皇子降誕ーまうら。只此上そ恐ろく
平産なりぬ玄奘を天地お祈り。今や〳〵と日夜お待れるも。敢〳〵御産の氣ハなり〳〵已お
二年十月乃日を重ね。れも若や御懷妊きくハなり〳〵血病なうの所為まやと疑まやぶ
人々心残ぞうる

釋迦御一代圖會卷之一畢

昭和42年12月12日寄贈
和田大作氏

洞冥寺程